学位申請論文審査報告書

氏　　名：鍵和田　聖子
報告番号：甲 176 号
学位の種類：博士（文学）
論 文 題 目：東密と台密の相互影響から見た受容と研鑽の展開
～事相・教相両側面からの討究～

鍵和田　聖子氏は 1979 年生まれの 34 歳で、東洋英和女学院大学人間科学研究科宗教学専攻修士課程を修了して、本学の文学研究科修士課程仏教学専攻に再入学し、引き続き同博士課程に入学、そこを満期退学して 2012 年 4 月 1 日より龍谷大学文学部の非常勤講師を勤めている。

なおその間、仏教文化研究所の研究員を兼ねたり、滋賀県文化財保護課において寺院の古典籍や梵音具の調査を行ったり、あるいは東京大学大蔵経テキストデータベース（ＳＡＴ）研究会のデータベース化作業員を経験したり、また龍谷ミュージアム事務部資料等調査補助員（学芸員の補助業務）や龍谷大学大宮図書館古典籍調査の助手など多方面で活躍し、その経験を生かして仏教学文献の扱い方や、仏教美術の実地調査を積んで自らの研究の一助として今日に至っている。その間に発表した論文は 10 点で、本博士論文の骨子となっている。

さて、本論文は 1 行 30 字 1 頁 15 行仕立てで全文 580 頁にわたった論文である。以下はまずその目次である。

目　次

序論

第一章　東密の形成～空海の図像制作を中心に～（平安時代初期）
第一節　空海の曼荼羅思想
　一項　密教における図像の位置づけ
　二項　空海の四種曼荼羅思想
　　一　四種曼荼羅思想の内容
　　二　四種曼荼羅思想による経典解釈
　　a『大日経開題』　b、『金剛頂経開題』 c、『法華経開題』
　　三　『十住心論』『秘蔵宝鑰』の帰敬序に表れた四種曼荼羅思想
第二節　空海請来による請来美術と密教図像の製作
　一項　空海が請来した美術
　二項　空海が製作に関わった図像
　a、千手観音曼荼羅　b、請来図像の転写と新たな図像の製作　c、金剛薩埵十七尊曼荼羅　d、四大明王の彫像と四摂・八供養・八方天の絵像　e 、金剛峯寺金堂の諸尊　f、東寺講堂の立体曼荼羅
第三節　複数の経典によって構成された東寺講堂立体曼荼羅の製作
　一項　東寺講堂立体曼荼羅についての解釈をめぐる議論
　二項　空海における三輪身についての再検討
　三項　空海思想に見える尊格の位置づけ

第二章　台密の形成と東密からの影響（平安時代前期）
第一節　台密の形成
第二節　初期の天台密教と空海密教との関係性

一 最澄と空海
二 空海に対する円仁と円珍の態度
三 安然による空海の捉え方
第三節　東・台両密の橋渡しとなった人物達
一　東密宗叡・玄静と台密安然
二　東密淳祐・元杲と台密良源の交流及び小野流祖仁海
三　台密皇慶と高野山金剛三昧院本『四十帖決』

第三章　台密の独自的展開（平安時代前・中期）
第一節　台密で独自に発展した事相
一項　阿字観本尊に関する台密の言及
一　台密における阿字観の評価
二　台密の文献に残された阿字観本尊に関する記述
三　台密文献に見られる九重阿字観
二項　台密の宝冠阿弥陀如来と阿弥陀法
一　常行三昧堂の本尊
二　台密の阿弥陀法における曼荼羅上の大日・阿弥陀の本尊位の交替
三項　台密における仁王経系曼荼羅様と文殊菩薩の鉤印
一　台密における仁王経曼荼羅様
二　台密における文殊菩薩の鉤印
第二節　台密独自の思想的展開
一項　台密文献に見られる両部即一の思想
一 両部而二不二に関する議論
二 安然の円密一致論における法華経と密教の関係とその他台密文献に見られる金胎両部の思想
二項　台密安然の『瑜祇経』解釈
一　空海の著述における『瑜祇経』の取り扱い
二　安然による『瑜祇経』の解釈

第四章　東密による台密の受容と展開（平安時代後期～鎌倉時代）
第一節　東密で用いられた図像に見られる台密の影響
一項　東密の阿字観本尊成立に見られる台密の影響
一　東密の阿字観と阿字観本尊に関わる文献
二　東密文献に見られる九重阿字観
二項　東密の紅頗梨色阿弥陀如来像の成立と台密の阿弥陀法の関わり
一　紅頗梨色阿弥陀如来像の思想的背景と成立時期
二　常行三昧堂本尊と紅頗梨　色阿弥陀如来の図像的比較
三　曼荼羅上における大日・阿弥陀の本尊位の交替
三項　東密の仁王経曼荼羅製作の意図とその分類
～仁海本仁王経曼荼羅の成立に見られる台密の影響を中心に～
一　仁海本曼荼羅考案の背景
a、五大明王を中心とする仁王経曼荼羅
b、仁海本における東上配置の背景
c 、仁海が金剛利菩薩を鉤形に表した背景
二　定海本曼荼羅考案の背景
三　後世の人師による仁海本への言及
第二節　東密で成立した両部而二不二思想における台密の影響
一項　東密済暹の両部即一思想と台密の言説
一　空海・覚鑁の両部思想概観
二　円珍の両部即一と済暹の引用
二項　東密の『瑜祇経』解釈の変遷における台密安然の影響

第五章　台密による東密の再受容
～東密で成立した両頭愛染の動向を中心に～　（鎌倉～南北朝時代）
第一節　東密・台密における『瑜祇経』所説の尊格理解
一 東密における愛染明王の理解
二 東密と台密の仏眼仏母に関する尊格理解の差異
第二節　鎌倉時代以降の東密における愛染明王の一展開～両頭愛染曼荼羅図を中心に～
一項　宗教思想史研究における両頭愛染についての評価
二項　慈悲形と忿怒形の両頭愛染
三項　愛染・不動二明王の組み合わせと金胎両部
第三節　両頭愛染に関する次第類の分析
一項　金沢文庫蔵書に見られる両頭愛染に関する次第類
a 、『一身両頭六臂愛染王』
b 、『両頭八臂愛染法王記』
c 、『両頭八臂愛染王記』
d 、『渇秘』「造人形杵事」
e、『隆鏡抄』
二項　高野山持明院蔵両頭愛染曼荼羅図と両頭愛染法
第四節　台密による東密の愛染法に対する批判と受容

結論

論文要旨

序論

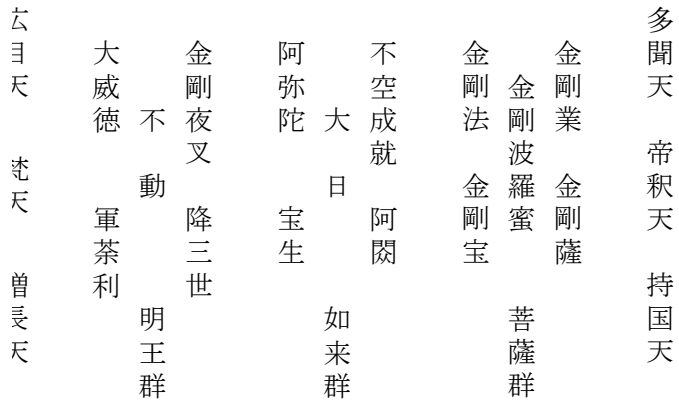
現在の日本密教研究においては、真言密教を東密、天台密教を台密としてこれを分類し、それぞれの専門範囲内で捉えるのが一般的であって、研究内容も教相分野と事相分野そして図像学等に大別され、個別に論じられる場合が多い。中でも基本的には東密か台密かのどちらかに立脚して教学史を述べるのが基本である。しかし本論文は、このような分類が定着することで解釈の幅を狭め、誤った認識を生む事例の多いことを指摘し、その視点から従来説を踏まえながらも、教相・図像・事相という多角的な視点から日本密教を捉え直そうとすることを目的とするという。特に事相と教相の密接な関わり合いを主題としながらも、東密・台密が盛んに交流、影響し合いながら発展してきた過程を明らかにして、日本密教を把握する方法論を提示したいという。

第一章 東密の形成～空海の図像制作を中心に～（平安時代初期）

ここでは、東密を形成した空海（774～835）による図像制作について論ずることで、日本における純粋密教の始まりを思想と図像の両面から考察している。

まず、思想面では「四種曼荼羅思想」を取り上げ、実際に図画される曼荼羅が思想体系の中で評価される様子を示し、空海における密教美術の位置づけを明らかにしている。その上で空海が請来、製作した密教図像について分析する中、特に東寺講堂の立体曼荼羅（図１）を取り上げ、今日まで様々に議論されながらも、その思想的背景が明確化されていない点に注目し、これを解明する中から空海思想を鮮明にしようと迫っている。

図１　東寺講堂の立体曼荼羅の配置図（平安時代の配置）



従来の研究において、本曼荼羅の思想的背景として位置づけられている一つに「三輪身思想」（菩薩・明王を如来の化身とする理論）があるので、まずこの学説の検討から始めている。その中において、空海（774～835）が確実に手にしたことが確認できる資料、並びに彼自身の著作の中からは、仏・菩薩・明王の配置の典拠と目されていた三輪身思想が認められないことを指摘する。そこでそれに代わる新たな典拠として鍵和田氏は『金剛頂経』系経典に広く説かれる金剛界三十七尊や『大日経』系経典に見られる、明王を如来の使者とする説が考えられると推論する。その上において、これまで十分に考察が進んでいなかった梵天と帝釈天についても検討の手を加え、空海が重要視した護国経典である『守護国界陀羅尼経』（以下『守護経』）に説かれる金剛城曼荼羅をもって説明できる可能性を示唆した。しかも明王群を除けば、立体曼荼羅と共通する尊格が多く配置されることから、『守護経』こそが曼荼羅作成上、大いに参照された可能性が高いことを指摘したのである。

要するに本立体曼荼羅は、密教の根本経典である『金剛頂経』『大日経』の両部と、国家鎮護を説く護国経典の思想との相まった基盤上において、それぞれの尊格群に関連性を見出して構築された空海思想曼荼羅であると結論づけている。

第二章　台密の形成と東密からの影響（平安時代前期）

本章では、平安時代前期に活躍した天台密教の思想家である円仁（794～864）・円珍（814～891）・安然（841～？）の三師を中心として、台密が如何に形成されていったかを求め、その形成時において東密の空海からの影響を探り、東密と台密の交流を位置付けようとしている。

まず、彼らの教学の特徴を示す中で「顕教と密教との関係性を如何に捉えていたか」に絞って言及する。その上で円仁と安然には密教を優位とする「円劣密勝」的な表現が見られることを指摘し、特に台密の大成者に位置づけられる安然が、円仁の思想をなお一歩深めていることを強調している。

さらに東密・台密の交流を、最初は天台宗祖最澄（766 又は 767～822）と空海（774～835）とに求め、最澄が空海に弟子入りする事により密教を教受したことや、次いで円珍や安然における教学内容に空海密教の影響が看取されることを考察している。中でも安然は、空海を一先学として捉えていたことを明らかにし、平安時代前期の台密の思想家が空海の影響を多分に受けていたことを示した。

また、歴史資料に残された東密・台密の枠を超えた師資関係や、両宗を行き来していた人物、書物などに着目し、東・台両宗に盛んな交流があったことを裏付ける事例を紹介し、教学や事

相における相互影響関係があったことの傍証としている。

第三章　台密の独自的展開（平安時代前・中期）

今章では、平安時代中期頃までの台密の独自的展開を論じている。要するに事相と図像と思想教学の三方面から、空海思想には認められない台密内における独特の発展に焦点を当てている。

平安時代前期頃の天台密教では、円仁・円珍・安然らが大いに活躍し、台密の立場を確立した一方で、東密は空海の教学の伝承に重きを置くだけで躍進的な教学展開が見出せないでいた。そのような中、台密では、事・教両相に渡って空海に見られない独自の展開が見い出せるという。

まず、事相面から「阿字観本尊に関する台密の言及」「常行三昧堂（以下・常行堂）本尊と台密独自の阿弥陀法」「台密の仁王経曼荼羅様」という三例を挙げて論じる。阿字観本尊とは特に東密で発展したと考えられる阿字観に使用する本尊で胎蔵と金剛界の二種がある。東密で完成形の阿字観本尊が説かれるのは平安時代後期頃の事であって、台密では先行して平安前期に円珍や安然によって執筆された台密文献上に阿字観への言及が見られ、具体的な本尊も説かれているとする。特に安然においては、胎蔵・金剛界本尊の区別も明確で、絵像の本尊を使用した記録も確認しながら、阿字観本尊は元々台密で独自に成立・発展したと考えられることを指摘する。

次に日本の常行堂は円仁によって比叡山東塔に建立されたのが始まりであるが、その本尊は宝冠を頂いた阿弥陀如来であった。このような宝冠阿弥陀如来は円仁請来の「金剛界八十一尊曼荼羅」に見られることを指摘し、宝冠阿弥陀如来は空海請来の現図曼荼羅には描かれておらず、台密で独自に用いられたと言えると述べる。しかも台密の阿弥陀法には、通常、大日如来を中尊とすべき曼荼羅において、西方に配すべきはずの阿弥陀如来を中尊に配し、西方に大日如来を移動させるという阿弥陀・大日交替の曼荼羅を用いる方法があることを指摘し、台密を中心に用いられた『大日経義釈』に説かれる曼荼羅であることも明かしている。しかもこれらは安然、覚超（960～1034）、皇慶（977～1049）などの台密人師の文献中にまま見られることから、この阿弥陀・大日説も当初は台密独自の阿弥陀法曼荼羅であったと考えられるとする。

また思想面では、密教の基本である金剛界・胎蔵の両部について台密における展開を考察している。今日では一般的に東密では金剛界・胎蔵の両部は「両部而二不二」とされ、台密では金剛界・胎蔵両部の外に蘇悉地を立て、両部を二而門、蘇悉地を不二門と解している。このような両部不二思想こそが台密で形成された考え方である事をここで論じている。

台密では天台宗の根本経典『法華経』の密教的解釈が進められるが、その中において円珍に仮託された『入真言門入如実見講演法華略儀』（以下『講演法華儀』）の存在が見逃せないという。この文献は天台教義と密教教義の一致を説く代表的資料であるとし、この中に明確に「両部即一」の思想が見られるというのである。これは、東密で両部不二思想が確立する以前の撰述と考えられるので、この不二思想こそが台密の独自的教学展開であると論断している。同じような解釈は東密の入唐僧によって請来された『瑜祇経』にも見られるが、空海の著述では本経を金剛頂経系経典に位置づけられていたので東密の人師は問題にしなかったという。ところが台密の安然は本経に胎蔵の要素を見出して、『瑜祇経』こそが両部に亘る不二の経典と解釈したところから、その後、台密において「金剛界の蘇悉地」として位置づける独自の解釈が見られるようになったと指摘している。

第四章　東密による台密の受容と展開（平安時代後期～鎌倉時代）

この章では前章に論じた台密独自の展開が東密にどのような影響を与えたのかを考察している。その結果、平安後期以降の東密では、事相・教相の両側面に亘って、安然を始め台密の影

響を色濃く承け、さらに東密的な解釈がほどこされて展開していたことが分かったという。

事相面では、最初に東密の阿字観本尊成立に見られる台密の影響を考察する。安然には金剛界本尊と胎蔵本尊の区別が見られたが、東密においてこのような区別が確立されるのは、鎌倉時代の頼瑜（1226～1304）撰『阿字秘釈』が最初で、本書には安然の釈が度々引かれていることから、頼瑜が安然を参照して阿字観の理論を立てたことを論証している。同時に、その他の要素からも東密の阿字観には、全体的に台密の解釈が大きく影響している可能性が高いことを論じている。

次いで前章で論じた台密の宝冠阿弥陀如来と、東密の紅頗梨色阿弥陀如来像（宝冠阿弥陀形をとる）の関係に論及している。紅頗梨色阿弥陀如来像は真言密教において、平安後期に覚鑁（1095～1144）などを中心に打ち立てられた「大日即弥陀」という理論の下、東密において成立したとされている。ところが本阿弥陀如来が説かれるという『無量寿如来次第御作』と『無量寿如来供養作法次第』は、空海撰と伝わるものの、それは偽撰で 12 世紀～13 世紀頃の成立と考えられという。宝冠阿弥陀像としては天台の常行堂本尊の方が遥かに先行すると見る。また、東密の承澄（1205～1284）撰『阿沙縛抄』には「東寺の恵什（1135 頃）・心覚（1117～1180）が宝冠阿弥陀像は無いと語っている」との伝聞記録が見えており、東密では 12 世紀頃まで、宝冠阿弥陀像は流布していなかったと考えられるという。なお、12 世紀頃の台密口決集である静然撰『行林抄』には平安中期の皇慶（977～1049）作『池上私記』が所収されており、紅頗梨色阿弥陀如来についての記述が見られることから、12 世紀以降に台密の道場観が東密に伝わり、上述の「二次第」は伝空海（774～835）撰として成立したと考えられるという。また、台密の阿弥陀・大日交互配置曼荼羅は、その後、東密でも見られるが、覚鑁（1095～1144）はこれを「大日弥陀一仏の義」によると解し、台密には見られなかった「大日如来と阿弥陀如来の同体」説という解説までもが付け加えらるようになったという。

さらに、東密の仁海（951～1046）によって考案されたと考えられてきた五大明王を中心に配置する仁王経曼荼羅についても、仁海以前に台密の安然がほぼ同様の構造を持った曼荼羅に言及しており、ここにも台密の影響があった可能性は高いとしている。

次に教相面についても、台密の影響下において東密の両部不二思想が確立されてきた点を考察する。まず、両部不二思想の形成者を覚鑁（1095～1144）とした従来説を否定し、すでに先行する思想として覚鑁以前の済暹（1025～1125）によってほぼ完成していることを指摘する。その上で済暹は台密文献の『講演法華儀』を円珍の撰述と認めた上で論を構築していることを論証している。

あるいは前章において論じた東密の『瑜祇経』解釈の変遷についてもこれを継承し、台密の安然の『瑜祇経』解釈の影響を受けて、東密においても「『金剛頂経』系の経典」から「両部不二の経典」へと変遷していく事になったのであろうと推測している。

以上より、従来東密において発展したと考えられてきた事相の幾例かは、先行して台密で行われていたことが判明したという。また今日、東密の根幹的思想とさえ捉えられている両部不二思想までもが台密の影響の下に確立したものであることを指摘している。

第五章　台密による東密の再受容（鎌倉～南北朝時代）
～東密で成立した両頭愛染の動向を中心に～

本章では、東密で成立した両頭愛染の動向を中心に論じている。両頭愛染曼陀羅図は愛染明王と不動明王を合体させた明王を中尊とする特異な曼荼羅でありながら、この研究は皆無に等しく、その成立や発展の経緯ならびに思想的背景を、新出資料を中心に論じ、両頭愛染を仏教学的な視点から捉えている。その内容は両頭愛染や両頭愛染にまつわる事相が台密によって受容される様子を探ることで、平安期に台密から多大な影響を受けた東密が、再度、台密へと影

響を与えた事例の一端としてこれを示している。
『瑜祇経』所説の尊格については、東密では愛染明王、台密の山門(比叡山)では仏眼仏母が修法の対象になった。特に、東密の愛染明王の尊格理解は『瑜祇経』が金胎不二の経典と解釈されると同時期に、盛んに両部不二の尊格と解釈されるようになり、経典解釈と尊格理解が密接に関係していた様子が窺えるという。さらに、愛染明王の異形である両頭愛染について残された次第類を分析すれば、醍醐寺周辺で成立し、あらゆる修法に用いられた記録が見られ、両部不二の尊格として性格づけられる部分が大きいことがわかったとする。
さらに、両頭愛染に対する言及は後に台密でも見られるようになるという。その台密の言及を確認すると、12～13 世紀頃には両頭愛染を異端的なものと見て否定的でありながらも、13 世紀後半から 14 世紀頃になると、両頭愛染の思想を円珍に仮託する説などが出て、徐々に台密における正当性が主張されるようになったという。このように中世になれば東密で「最極深秘」とされた両頭愛染法までもが台密に流入しており、中世密教の一特徴として捉えたいと結んでいる。

結論

以上により、日本密教においては東密と台密が密接に交流しながら、それぞれの立場に立脚して密教を形成、発展させてきたという。また、事相や図像と教相は切り離せるものではなく、図像は修法や観想法の本尊観の図像化で、多分に思想的背景が隠れているので、日本の密教を考える上においては、東密・台密・事相・教相という細かい分類に執らわれることなく、日本密教という大きな流れの上から考察すべきであると結論づけている。

本審査委員会の評価

現在までの日本密教研究は東密・台密という分類でもって、宗派意識の上から研究が進められて来た感がある。しかもそれぞれの内部研究も、教相分野・事相分野・図像分野として大別され、その専門領域において各別に論じられる場合が多かった。従って東密か台密かの何れかに立脚し、教相分野の範疇で教学史を述べる多数の日本密教史研究が提示されている。鍵和田氏はこれら従来の研究方法を踏まえながらも、各密教内における教相・図像・事相という三方面、特に図像学を重視した視点から、まず両宗派内教学を把握し、その上において日本密教を総合的に捉え直し、そこから浮かび上がった東密と台密との交流、並びに相互影響を指摘し、それに検討を加えたのが本論攷である。これだけの広範囲な研究である以上、もちろんその対象は限定されるのはやむを得ないが、東・台両密教が互いに影響し合いながら発展してきた過程の一部が鮮明になり、かつて試みられる事の無かった日本密教を総括的に把握しようと努めた点は大いに評価できよう。新しい方法論を提示した意欲的な論文と認められる。
さて、その具体的内容であるが、特に第３・４章に重点があるように思われる。第３章では台密の独自的展開を論ずる上で、事相面から「阿字観本尊に関する台密の言及」と「常行三昧堂(以下・常行堂)本尊と台密独自の阿弥陀法」並びに「台密の仁王経曼荼羅様」の三例を挙げて検討し、それぞれに東密を中心に発展したと考えられてきた思想が、実は台密教学上から導き出された成果であったことを論証している。ここに東密に対して台密の影響力を見出したのは卓見と言うべきであろう。
中でも、東密の紅頗梨色阿弥陀如来像に台密の宝冠阿弥陀如来や台密における事相文献の記述が大きく影響しており、12 世紀以降に台密の道場観が東密に伝わったものと考えられると推測する点も評価できよう。
また東密の両部不二思想に見られる台密の影響を指摘した一段も大いに評価するに値できるであろう。両部不二思想の形成者を平安時代後期に活躍した覚鑁とするのが東密側の有力説で

あるが、その先行思想を覚鑁以前の済暹に求め、彼によってほぼ完成したことを示し、しかも、その済暹が台密文献である円珍の撰述書と伝えられる『講演法華儀』からの影響を承けて論を構成していることを論証したのは多くの学者に関心を与えることになるであろう。このように東密の根幹的思想とさえ捉えられてきた両部不二思想が、実は台密の影響下に確立したものであることが論証されれば、従来の研究に一石を投じることになるといえる。

最後の第５章の論述も重要なものと考えられる。すなわち、13 世紀頃に至ると、今度は東密が台密に影響を与えることを論ずる一段である。その内容をこれまで余り研究対象とされて来なかった両頭愛染像に焦点を当てて、その成立過程と両頭愛染曼陀羅図の思想的背景を論じたものである。しかもそこでは新出の口伝資料を中心として論を展開している点も見逃せない。

両頭愛染像はこれまで、宗教思想史の方面の研究で言及されることがあっても、仏教学的な視点から捉えた研究は本論が最初であろう。

その両頭愛染像が『瑜祇経』所説の尊格を題材とすることで、『瑜祇経』が金胎不二の経典と解釈されるのと同時期に、盛んに『瑜祇経』所説の愛染明王が両部不二の尊格として解釈されるようになるなど、経典解釈と尊格理解が密接に関係していた様子を第 3・4 章との関連において明らかにした点も、他に類例のない研究と言えるであろう。

また如上の成果ほどではないにしろ、第 1 章で、空海思想を論ずる中、東寺講堂の立体曼荼羅に論究したのも密教学者としての一面を覗かせているといえよう。多くの議論を呼びながらも、背景となる思想が明確に追求できないできた本曼荼羅配置の思想的背景を追求すべく鍵和田氏はそれに挑んでいる。そこでは、従来説の「三輪身思想」を否定し、『大日経』や『金剛頂経』系経典の関わりを指摘し、さらに進んで「梵天」と「帝釈天」についても論究している。これらは可能性を指摘したに留まるが、一つの考え方を示した点で学界に新風を吹き込んだものと思われる。

以上のように、特に図像学を加味させながら、時系列的に日本密教を眺めたところに本論文の特色が見いだせる。東密と台密が密接に交流し、それぞれの立場における密教学を形成、発展させるには相互影響を切り離して考えることは不可能である事を力説するところに主題があるといえよう。それを東密・台密、あるいは事相・教相・図像という分類の専門の領域を超えて、密教全体の流れから教学史を把握すべきであることを主張したのは鍵和田氏が投げかけた新たな視点といえる。

ただ残念ながら、研究範囲が広大な上に、論点が多面的であった為、各章に取り上げた文献の資料批判が充分になされていない点が気に掛かった。新たな文献を指摘しながら、事相における口伝書にも、経論疏と同じような扱いがなされ、その文献としての価値を吟味批判することなく、内容に信頼を寄せるなど今後の研究の課題は残されている。だが、いずれにしてもその視点は素晴らしく、大きな成果を打ち立てた論文として高く評価できると思われる。従って本審査委員会は龍谷大学学位規程第３条第３項の定めるところにより、鍵和田聖子氏を博士（文学）の資格を有するものであることを認めるものである。

平成 26 年 1 月 24 日

主査　淺田正博
副査　宮治　昭
副査　那須英勝